

兵庫県医師会医療支援チーム（第11陣）「宮城県災害支援現地報告」

明石市医師会 兒玉 峰男

16年前に姉夫婦一家（元和田山保健所所長、故小亀正昭）、4人中3人を阪神・淡路大震災で亡くし、悲嘆のまっただ中で全く何の貢献もできませんでした。気仙沼市の給水車、仙台市のゴミ収集車といった宮城県の支援をはっきり記憶しておりました。今回の派遣のアンケートが届き、現地の先生方の邪魔になってはいけないかもと少しためらいましたが、手を挙げてよかったというのが正直な感想です。恩返しの感情が強く、現地に着くまでは「あれも」「これも」「寝袋持参で」とまで思っておりました。しかし、日和山公園からの景色を見て圧倒され「これは・・・」と言葉が続かないのです。圧倒的な大自然の力の前に「自分ができることをしっかり対応しよう」と思いました。先発隊の諸先生方のおかげで診療はすぐにでもできるような状態でした。しかしながら、食事については、私が見たのが一番悪い日だったのかもしれませんが、避難所の朝の食事が、6個入りのテーブルローラー袋だけ、昼は6枚切りの食パン一袋とソーセージ1本だけなのです。どうも入浴もまだされていない様子。食・住環境の改善が急務です。また、被災一ヶ月という節目の時、精神的に不安定な方も散見され、中には在宅避難者で救護所を受診された方から「心のケア」の相談が寄せられたりしておりました。まさに、まだまだ表面に現れていない問題が隠れていることを示唆すると思います。私は自分の経験から、周囲からの声かけは「がんばれ！」「復興に向けて！」だけでなく、「もうこれ以上がんばれない」人もいることや、とても復興どころではない人もいらっしゃることを心に入れ、よく話を聞き、本人が現実を受け止める時間が必要だと思います。また、大の男が涙を流す時があってもいいと思います。今後は学校の再開にあわせて、避難所の統廃合や、救護所のあり方も含めて医療提供体制の再構築を要する日が来ると感じました。再度の派遣要請があれば、また喜んで参加したいと思います。